

課題

大学生に対する学習支援の必要性について、考えを述べなさい。

その際に、大学における学習をどう考えるのか、大学における学習支援とはどのようなものかについても言及すること。

大学生に対する学習支援の意義について

—能動的な学習を創出する環境としての「他者」—

1. はじめに

大学での学びは、高校までの学びとは違うと言われる。高校までの学びは、受験勉強に代表されるように、答えが1つに決まっている。それを授業や教科書を通して学び、試験によって理解度を確認する。一方、大学での学びは、答えが複数あったり、同じ答えでもそこにたどりつく方法が複数あったりする。問い自体を学生が設定することも多く、自分なりの解法や答えを探究していかなくてはならない。つまり、高校までは先生や教科書が知識を与えてくれる受動的な学習だったのに対して、大学では能動的・主体的な学習が求められるのだ。

主体的に学ぶのが大学生だとすれば、大学生に対して他者が学習支援を行うのは、矛盾するように思われる。しかし、東北大学にも学習支援センターがあり、上級学年の先輩であるSLA (Student Learning Adviser) が後輩の学習にアドバイスをするといった支援が実施されている。筆者自身も、数学や物理学の学習で利用することがある。同様の形態は、他の多くの大学でも設置されており(学生支援機構 2014; 北海道大学ラーニングサポート室)、学習支援の重要性が認識されていることがうかがえる。では、大学生に対して先輩学生が学習支援を行う意義は、何だろうか。

以下では、まず支援の対象となる「学習」とは何かを検討する。続いて、国内で実際どのような学習支援が実施されているのかを確認したうえで、学習支援の意義を考える。なお、3章で言及するように学習支援には様々なものが含まれるが、本稿では、授業外でSLAのような先輩学生らから受ける直接的支援を中心として議論を行う。

2. 大学における学習

稲垣・波多野(1989)によれば、学習についての見解には、「伝統的な学習観」と「新しい学習観」がある。伝統的な学習観では、「教え手がいてはじめて学べる」(p.7)のが学習であり、学び手は受け身の存在とみなされている。教え手の仕事は「知識を伝達する」(p.7)こと、そして「その知識が必要な作業なり、問題の解決などを学び手にやらせてみて、正誤の確認情報を与えること」(p.7)であるという。一方、新しい学習観では、教え手の存在は重視されず、「学び手は、能動的でかつ有能である」(p.18)ととらえられる。「学び手は、教え手から知識を伝達されなくとも、みずから知識を構成することができる」

(p.19) という。つまり、能動的な学習者にとっては、教え手の存在は必須ものではないことになる。

大学での学びは主体的・能動的なものであるはずで、後者の新しい学習観に合致する。伝統的な学習観には、「学び手が受動的な存在であり、しかも有能でないという仮定」（稲垣・波多野 p.9）があった。だが、冒頭で述べたように、大学での学びは高校までの学びとは異なり、自ら課題を設定して答えを探究していくことが求められるのだ。

では、能動的に学ぶべき大学で、なぜ他者からの学習支援が行われているのだろうか。まず、大学生が能動的に学ぶというのは理想論に過ぎず、実際にはまだまだ受動的な姿勢の学生が多いという理由が考えられる。受動的な学習者に対しては、様々な場面で教え手が必要であり、その意味において大学生にも学習支援が必要だということになる。次に、実際の初年次教育では、多くの授業が一方的な講義形式で行われ、能動的な学びの機会となっていない可能性もある。つまり、大学生自身、あるいは、大学の授業が能動的ではないために学習支援が必要とされていることが考えられる。

しかし、こうした状況は、高校生に対して教え手が必要な理由と同じであって、大学生に対する学習支援の必要性とは異なる問題としてとらえるべきである。単に、その大学や大学生が「大学での学び」への転換ができていないだけであると解釈できるからだ。したがって、大学生が能動的な学習者である場合に、学習支援がどのような意味を持つかという議論が必要である。

3 大学における学習支援

大学での学習支援の状況を知るうえで、数年毎に行われる日本学生支援機構による調査が参考になる。例えば、2013年には国内の1,122校の大学等を対象に、「大学等における学生支援の取組状況に関する調査」が実施されている（日本学生支援機構 2014）。一連の調査項目には、図1のように修学支援の取り組み状況もある。この修学支援とは学習支援も含むものであり、小島（2014）によれば、2009年の調査では区別されていた学習支援と修学支援とを2013年の調査で統合したという。区別をやめた理由とそれぞれの定義については記述が見あたらなかったが、ここではいずれも大学生の学びを支援する取り組みとみなして検討する。

図1に示すように、大学では多様な修学支援が行われている。割合が最も高いのは「保護者に対する成績通知」の86.7%で、「成績優秀者に対する表彰（学長賞など）」の77.0%が続く。本稿の焦点である「上級生・大学院生による学習サポーターの設置」を行っている大学も、全体の6割を超えている。ラーニングコモンズは半数近くの大学で、LMS

（Learning Management System）¹は、3分の1以上の大学で導入されている。こうした設備や学習システムの設置に関する質問は、2013年に新たに加えられた項目とのものである（小島 2014）。この調査では、学習環境の整備も重要な修学支援としてとらえていることがわかる。

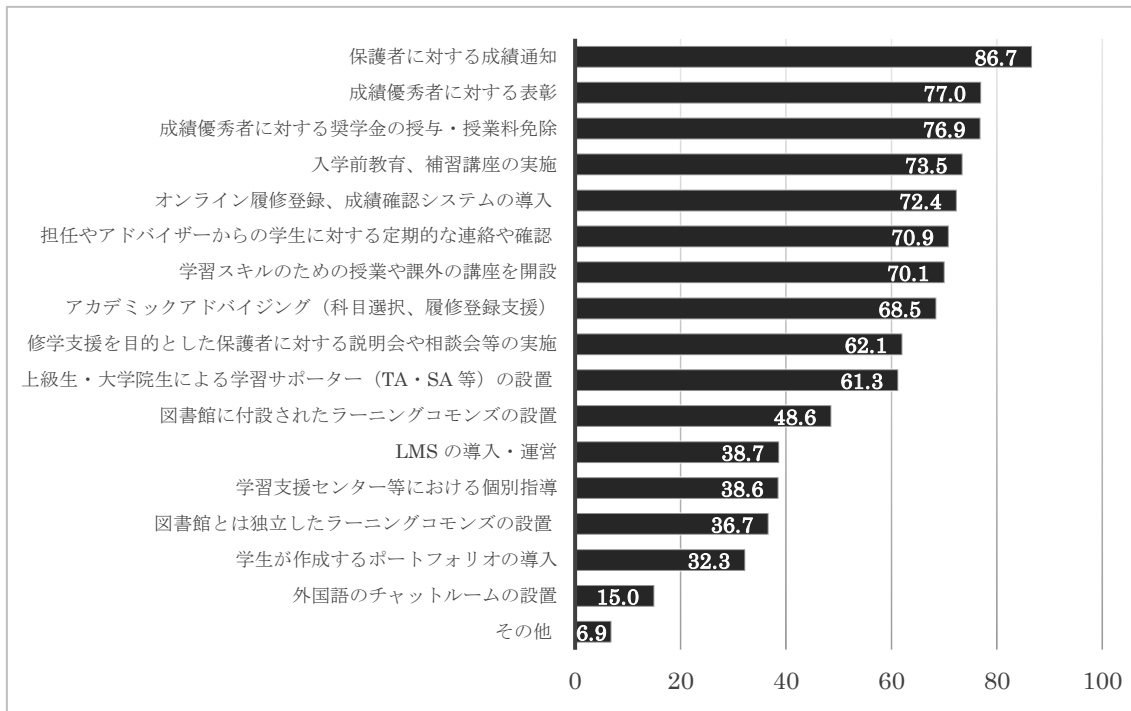


図1 大学で実施している修学支援の取組 (%)

(日本学生支援機構 2014, p.6 のデータを基に筆者作成)

学習環境という観点からみると、ラーニングコモンス等の物理的な設備だけでなく、その場に存在する人も重要な環境の要素とみなすことができる。稲垣・波多野 (1989) は、最良の学習環境は他者であると指摘している。これによれば、「獲得すべき知識をすでにもっている他者」(p.119) は、初めは学び手に例を見せたり、つまづいた場合に手助けをしたりするが、徐々に手助けを減らしていく。最終的に学び手がひとり立ちできるように、様子を見ながら、手助けの割合を調整することができるという。支援を受ける側と支援をする他者との関係は、決して依存的なものではないのだ。

学習環境としての他者には、異なる視点を提供できるという長所もある。稲垣・波多野 (1989) は、他者は必ずしも学び手よりも知識が豊富である必要はないと述べている。自分とは異なる視点から物事をとらえたり、批判的な視点を示してくれたりする他者がいることで、一人では気づかなかったことに目を向けることが可能になるという。筆者が学習支援センターで受ける支援にも、同様の面がある。SLA に自分の疑問点を説明してやりとりをする間に、解法を思いつくということがあるからだ。

さらに、先輩学生による支援には、大学教授よりも身近な存在としての利点がある。知識の多い者が少ない者を支援するというだけならば、教授対学生でも成り立つ。だが、多忙な教授に質問に行くのはためられるという学生も多いだろう。思いつきのアイデアにコメントを求めるといっても、申し訳なく感じる。一方、学習支援センターの先輩であれ

ば、授業内容の理解をさらに深めたいと思ったときに、より気軽に向かうことができる。学習支援という場があることで、疑問や探究心がしばむ前に他者との対話を行い、能動的に学ぶことが可能になる。

4. おわりに

本稿では、大学における学習支援の意義を考察した。まず、稲垣・波多野（1989）をもとに、大学での学習について検討した後、全国で実施されている多様な学習支援について見てきた。その結果を踏まえ、能動的な学びのための学習支援は、学習環境の整備と定義できると考えた。学習環境には、LMSなどの物理的な設備だけでなく、他者の存在も重要である。稲垣・波多野が述べるように、学習の進展に合わせて、自分よりも熟達した他者から援助を受けられることは有意義だからだ。また、稲垣・波多野では、他者には手本としての役割だけでなく異なる視点を提供してくれるという役割もあること、その他者との対話を通じて学習を深めることができることも指摘されていた。筆者自身の経験からも、教師よりも立場の近い先輩からの手助けが非常に有効だと感じられる。このように、SLAのような先輩学生からの学習支援は、能動的に学ぶための学習環境として意義がある。

注

1. LMSは、eラーニングなどの学習管理システムのことである。東北大学インターネットスクール（ISTU）もLMSにあたる。

引用文献

稲垣佳世子・波多野誼余夫（1989）『人はいかに学ぶか—日常的認知の世界—』中公新書
小島佐恵子（2014）「修学支援の現状と課題」『学生支援の最新動向と今後の展望—大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成25年度）より—』17-28.

日本学生支援機構（2014）『「大学等における学生支援の取組状況に関する調査（平成25年度）」集計報告（単純集計）』

北海道大学ラーニングサポート室 http://asc.high.hokudai.ac.jp/learning_support/learning_support.php